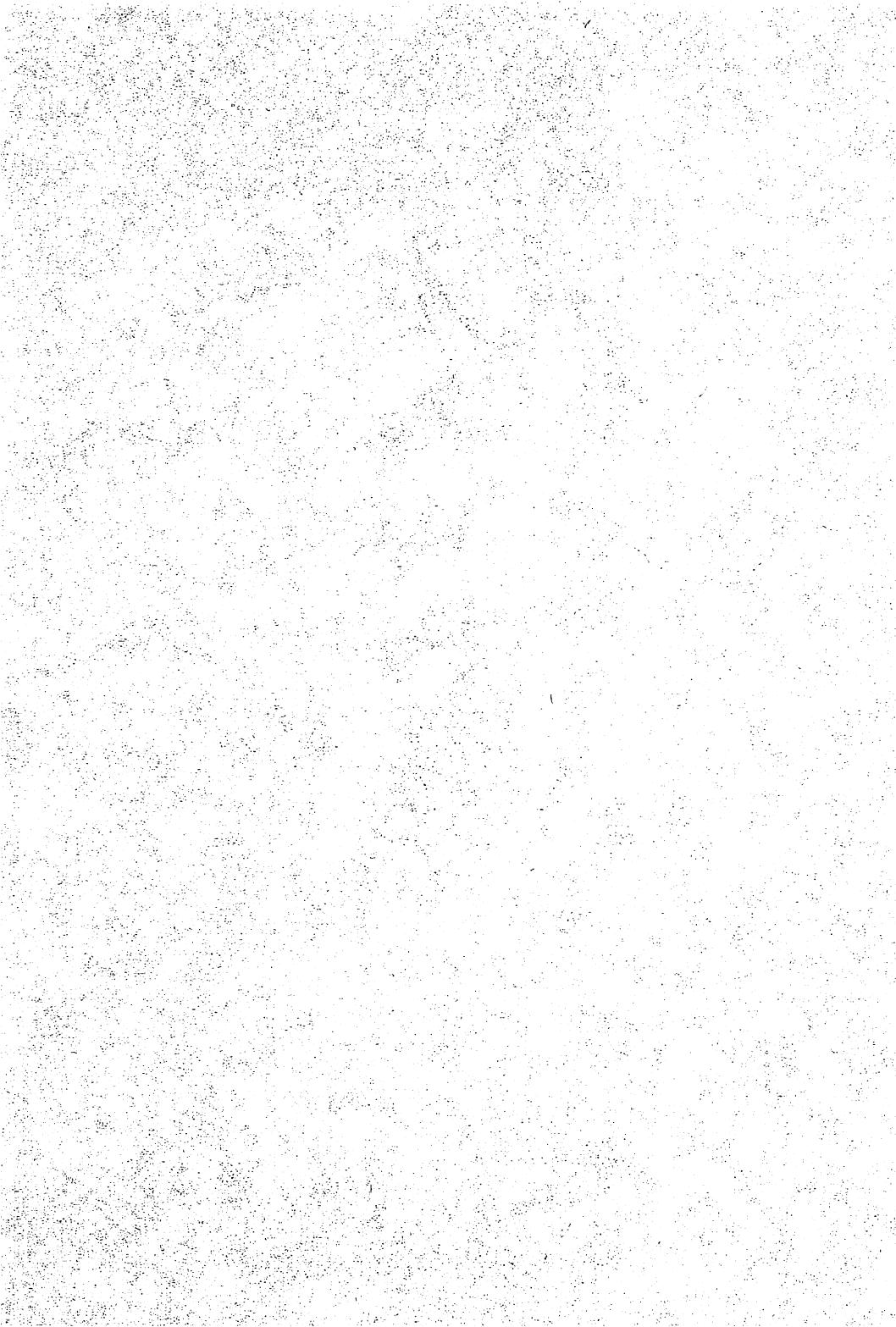


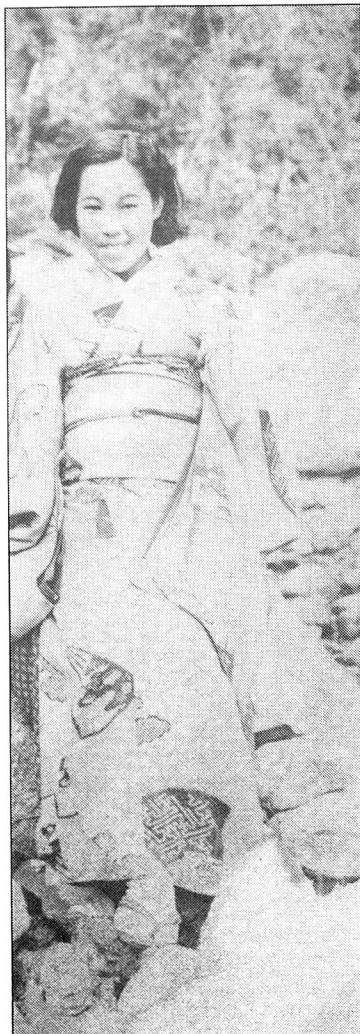
不入山山禁

不入山山
禁以





昭和61年2月16日
三軒茶屋カトリック教会
追悼ミサでの房子の遺影



の高知県高岡郡東津野村口日ヶ市
中河原にて
昭和十六年四月二十五日
房子二十四才

目 次

まえがき	1
小平房子詠	
入選歌（婦人之友社 雑誌 婦人之友）	5
編者選歌	11
疎開中の妻より編者に送られし歌	35
小平正治詠	
入選歌（角川書店 雜誌 短歌）	43
選者略歴（右 同）	61
自選歌（右に応募せし短歌の中より）	71
戦時中詠める歌	107
編者が疎開中の妻に送りし歌	123

あとがき

編者略歴

131

129

まえがき

私は昭和十六年六月から東京市（昭和十八年七月から都となる）防衛局の職員でしたがその年の十二月八日に太平洋戦争が始まり昭和十九年になって敗戦色が濃くなつて来た六月に妻と生れたばかりの長男を、妻の故里の高知県高岡郡東津野村に疎開させました。そして私は防衛局の独身寮を生活の本據として首都の民防空の仕事に当りました。

独身生活の味けなさと何時召集令状が来るか知れない不安の日々を送つてている時に、つぶやいていることが三十一文字になつてゐるのです。その様な時に銀座のさる書店でふと見つけた朝吹磯子著「蒼樹」という短歌集を参考にして我流で詠んだ短歌を帳面に書き留めて置いたのが百首を越えていました。

戦争が終り世が平和になると何時の間にか私は短歌を詠むことを忘れてしました。

妻は房子と云いますがただそこに坐つて居るだけで家中がなんとなく温かなごやかな雰囲気になっていくのでした。

妻は身体が虚弱でしたが弱いなりに氣をつけて来ましたのでこの分なら長生きでき

て結婚五十年をお祝いすることが出来ますねと喜んでいました。ところが昭和五十八年の末に腰に激しい痛みを訴える様になり鬪病生活が始まりました。そして二年二ヶ月の間に入退院をくり返しました。妻は一生懸命治療にはげみましたがその甲斐もなく昭和六十一年二月十日に死去しました。（病名膠原病・享年六十八才）私たちは結婚四十八年でした。

妻の死去という衝撃で又歌が甦えって来ました。昭和六十二年の春から今日迄角川書店の総合雑誌「短歌」の公募短歌館に応募して来ましたが度々入選しています。この私の入選歌と亡妻房子の戦前戦後の入選歌とこの外に私の選んだ「亡妻の歌と私の歌」と併せて二百首を収めて出版しました。

この短歌集の題を「不^い入^い山^ま山麓」と名付けました。

亡妻のふるさとの四万十川幹流の源流点に位置する山を不^い入^い山（海拔一三三六メートル）といいます。

この山の名をとりました。

この短歌集を亡妻の靈前に捧げます。

始めての短歌集の出版に当り素人の私に色々とご助言下さいました電通コーテックにお礼を申しあげます。

房子よ!! 安らかに憩はんことを。

平成三年八月吉日

小平正治



入選歌
(婦人之友社)

小平房子
詠

婦人の友（昭和十五年五月号）

選者 若山喜志子（敬称略・以下同）

佳作 小平房子（台湾）

故郷想う

友達の家の黍飯珍らしみ分けて貰いしことの幾度

北風のさむき野面を笊さげて祖母の好める芹つみにゆきし

にぎりめし造りて祖母とひねもすを鎮守の森に遊び夏は

やなぎ虫餌にして糸垂る中河原祖母には釣れて我には釣れざり
し

婦人の友（昭和三十年十月号）

選者 若山喜志子

佳作 小平房子

みやげにと妹の持て来し亀の子の二疋は幼き児等の良き友

雨ふればせまき家ぬちに男の児等は亀をかこみて一ときかしま

し

選者略歴

若山喜志子氏（明治二十一年生 昭和四十三年没）

旧姓 太田

出身地 長野県

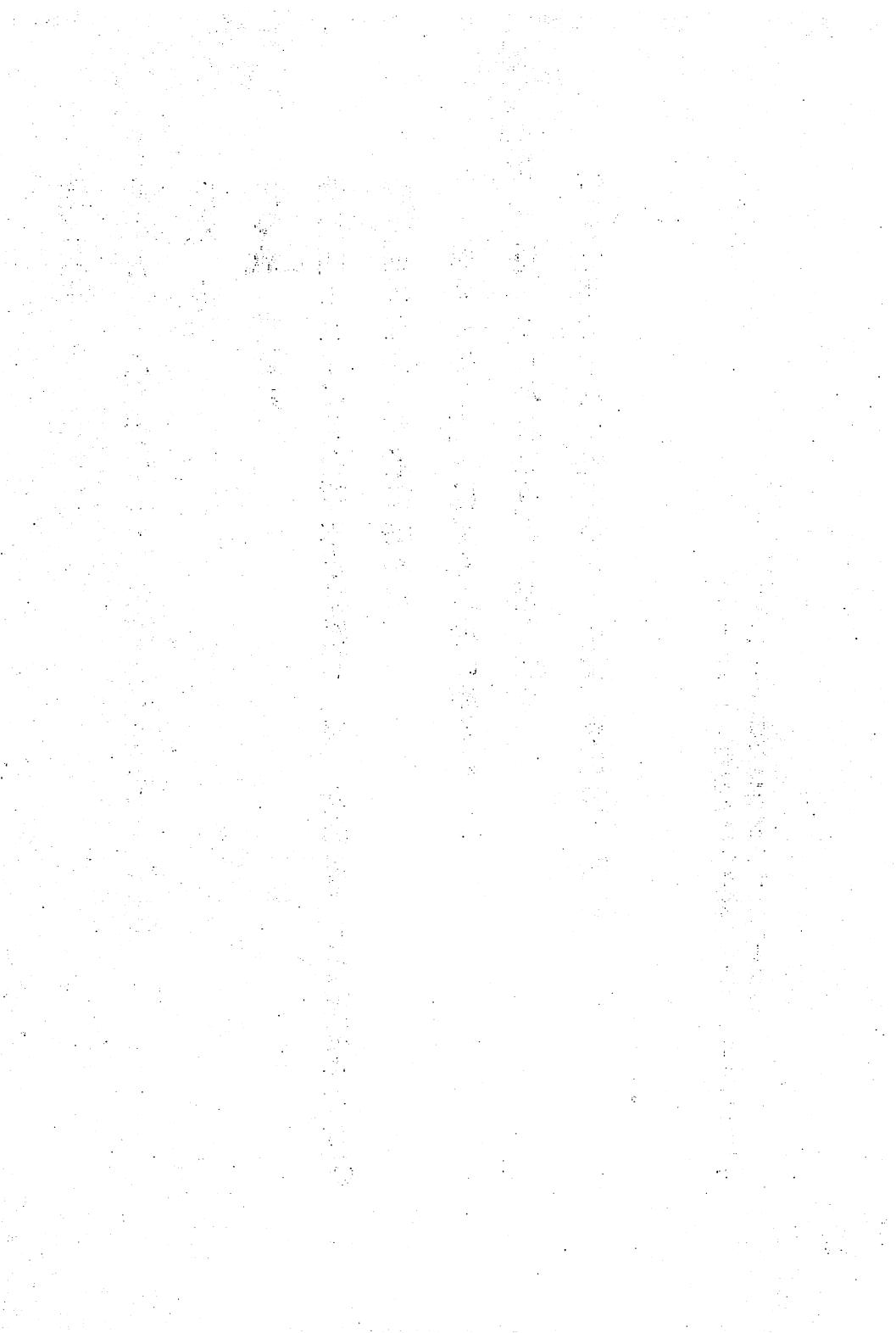
明治四十五年に若山牧水と結婚し二男二女の母として家庭を守り牧水を助けながら作歌に励んだ。

萌えそめし麦をはぐくむ地のぬくみ

見つしわれはみどり児を抱く

牧水は明治十八年生で昭和三年没、享年四十四歳。

（アサヒグラフ 昭和短歌の世界（一九八六年十二月二十日発行）と藤岡武雄著若山牧水による。）



編者選歌

小平房子

詠

男兒服賜へと乞いぬ女兒持たぬ我に女兒持つニコヨンの母

(ニコヨン労務者)

炎熱の道路工事の人夫らにつめたき麦茶ふるまいにけり

生きるてうことのきびしさ今日も又老いし夫婦はつるはしを振
る

嫁ぐため帰郷の妹を見送れば肩を冷たく秋風のうつ

大司教と並んで写せしとよろこびて語る幼き次男は

をみな吾安ものなれど柄のよき茶羽織を着てこころ足らへり

病み病みてこもり居すればいつしかに親しき友もはなれゆくな
れ

こもり居のさ庭に出でて秋の陽をまぶしと仰げばかろき日まい
す

妹嫁ぐを誰にもまして祝えどもむねをかすむるたまゆうの哀愁

さしのぞく男の児二人に笑み返し日暮の窓にものおもうかな

こもりゐの馴れし我なり外出にはおづおづよぎる横断道路

妹ゆすこやかにして信濃路に新婚の旅つづけおるてう

亡き父にどこか面わの似通える老いしくす醫師ひじを今日も頼みき

（以上昭和三十年作）

伯母我に似るてうまだ見ぬ幼姪そのゆくすえの幸をぞねがう

（昭和三十一年七月）

はろばろと遠き汽車路を來し子等に甘きみかんを賜う人あり

（昭和三十二年十月）

山かいの津野の県道ゆくバスに野良着姿の佳き人を見き

（昭和三十二年十月）

命ありて親子四人のよりそいぬこの上多くなにをのぞまむ

正寿まさとしよ正男よその名のごとくあれ正しくつよく清き幸あれ

今朝も又五時におきいでくりやべに夫子のために炊ぐ偉せ

（昭和三十五年一月）

風はやや冷たけれども陽はうらら一つ木健児らたくましきかな

昭和四十年九月十三日、次男の聖パウロ学園高等学校体育会を見て

いねられずもの思いおれば春の雨はげしき音を立てて過ぎたり

(昭和四十九年二月)

午前二時激しき動氣に病みて枕の位置を変えてみるなり

(昭和四十九年二月)

しづもれる真夜を覚めいて脈白の結滯數う確かむること

（昭和四十九年二月）

たぐいなき華麗さを見き質素なる聖堂の中の叙階の式に

清貧、貞潔、従順、誓う若者よ、十字架に黙し打ち伏しつ

わが道を選びし健気の若者らよ人心乱れし現の世にありて

助祭叙階式のミサにあづかりて主日
昭和四十九年三月二十四日

いとし子は若き司祭よ使命帯び五月の夕べを鹿島立ちたり

吹きつける送迎デッキの風に佇ち子の乗る機影点となるまで

いとし子の乗りし機影は夕雲に一つの点となりて消えたり

昭和五十年五月十日 ローマ留学の長男を羽田飛行場にて見送る

いとし子は若い司祭よ使命受けローマに学びてふたとせを経ぬ

(昭和五十二年五月十八日)

朝夕の雨戸操りつつ思うことローマの空よつつがなかれと

(昭和五十二年五月)

わが夫子に初めて見えし遠き日よわれは五才の童女なりき

(昭和五十二年五月)

夫子は古語。昔、女が夫、兄、弟など、男を親しんで呼んだ語。
この歌では夫の正治のことです

万葉集第一〇五番

「わが夫子を大和へ遣るとき夜更けて暁露に吾が立ち濡れし」

四十年病むとき多きわれなりき優しき夫の愛に守られて

(昭和五十二年五月)

外国とつくにを旅する子の身思おもいおればはげしき音して夏の雨過ぐ

(昭和五十二年八月)

教会の櫻病葉散り敷きて今年の秋も深まりにけり

朝まだき牛乳配達する人はまだ紅顔の少年なりき

秋の夜の染み入るまでの静けさよローマの子の身切に思わる

母われの命は要らず留学の子を守りませと祈る日々かも

朝は朝ゆうべは夕べま昼にも心はローマに子を守りたし

(昭和五十二年十一月)

受話器とれば妹の声優しくて小夏柑を送りしと云う

妹の心づくしにふるさとの初夏の味覚を拌みて食む

亡き母に捧げまつらん純白のカーネーションは襞ふかく咲く

ゆきすりの幼児の胸の白き花この慣わしを哀しと思う

(昭和五十三年五月)



疎開中の妻より編者に送られし歌

小平房子

詠

蟬鳴きて一番草も終えにけり夏のまつりもはや近づきつ

（昭和十九年七月十五日）

背なる陽を受けて草とる人ここかしこ増産戦士と呼ばれて

（昭和十九年七月十五日）

すこやけき吾子のね息と雨の音聞きつつ山家やまが今日も暮れゆく

（昭和十九年八月二日）

疎開してこの山里の明けくれや吾子の肥立ちのすくすくと

（昭和十九年十月十三日）

日と共に育ちゆく子のすこやかさ君に見せたし都の君に

（昭和十九年十月十三日）

人の世の情けしみじみ身にはしむ母上の吾子に対する真実さ

（昭和十九年十月十三日）

母我の胸おしのけて手をのばす庭のコスモス目にとまりしか

（昭和十九年十月十三日）

いつになくむづかる吾子の熱っぽさ母の云らせり歯の生う熱と

（昭和十九年十月十八日）

熱去りて今日はかそけき白き歯の肉つきやぶりて生えいでにけ
り

（昭和十九年十月十八日）

正寿に乳ふくませつこの幸をなににたとえんだりが度き

（昭和十九年十月十八日）

人の云う幼き者の日に増して君に似ますと嬉しくきくも

（昭和十九年十月二十一日）

果てしなき君への想い打ちとどめタげの支度にとりかからまし

（昭和十九年十月二十一日）

雨の音聞きつつ秋の静夜を都の君にたよりしたたむ

（昭和十九年十一月）

おろかしき我をば母と頼みてか吾子は安けきいびきもらすも

（昭和十九年十一月）

入選歌

小平正治 詠

角川書店 雑誌 短歌

(括弧内の数字は入選の年月を示す)

（敬称略・以下同）

選者 島田修二（昭和六十二年六月号）

佳作

七十を待たずして逝く友等あり七十はやはり古稀とぞ思う

選者 王城 徹（昭和六十二年九月号）

佳作

妻死して葬儀のミサは神父なる長子がたてり我感動す

選者 島田修二（昭和六十三年一月号）

佳作

閉鎖する都営団地の一夏を無心に野菜作る人あり

選者 吉田 漱（昭和六十三年三月号）

佳作

亡^つ妻^ま宛のカタログ広告捨て難く虚ろな日々を重ね過しきり

選者　来嶋靖生（昭和六十三年二月号）

秀逸

亡き妻の好みしテレビ番組を何時しか我也見て過し居り

評

妻の生前それほど好んで見ていたわけではないのだが、妻が好きだったた
る番組を、いつのまにか自分も見るようになっていっているという歌。

淡淡と歌っているが、亡き妻を偲ぶ心持があり、しつとりと読ませる。
感情語を抑えるほうが余韻を伴うという好い見本である。

選者 小市巳世司（昭和六十三年四月号）

佳作

妻あらば如何せしかと思いつつ年末の雑事をなし居り我は

選者 吉野昌夫（昭和六十三年五月号）

佳作

今天に昇りしことを実感す妻の亡骸を見守りていて

選者 玉城 徹（昭和六十三年十一月号）

佳作

身罷りし老妻^{まつ}との出合いは日曜学校なり我九歳にて妻は五歳なりき

選者 篠 弘（昭和六十三年十二月号）

佳作

亡き妻の残せし文箱開けみれば溢れる程の千代紙なりき

選者　来嶋靖夫　（平成元年三月号）

秀逸

亡き妻が作り置きたるらつきょう漬食むを惜しみて口付けず居
り

選者　島田修二　（平成元年四月号）

佳作

鹿児島の友より届きし桜島大根は形を賞でて床の間に置けり

選者 太田青丘（平成元年六月号）

佳作

Yシャツのサイズを手帳に書き留めし亡妻まの筆蹟を箱に見つけぬ

選者 吉野昌夫（平成元年七月号）

佳作

日暮れ迄泥んこ遊びに耽りたる幼馴染の亡き妻なりき

選者 宮 英子（平成元年八月号）

秀逸

余暇あれば切絵などして慎しく少女の如く生きたりし妻

選者 吉田 漱（平成元年九月号）

秀逸

亡き老妻つまの残せし小箱開け見れば吾子の臍の緒と産毛なりき

選者 小市巳世司 （平成元年十月号）

佳作

四十八年間虛弱な妻を労わりて臨終を見守る我の安らぎ

選者 中野菊夫 （平成元年十一月号）

佳作

不安げに道を聞く人に教えれば安堵の色濃く振り返り行けり

選者 雨宮雅子（平成元年十二月号）

佳作

糠味噌を漬ける新婚の嫁の指マニキュア無くとも輝いて見ゆ

選者 篠 弘（平成二年二月号）

佳作

四十八年間不平云はざりし妻によりてわが品性は清められたり

選者 島田修二（平成二年一月号）

秀逸

糠味噌を実家さとから取り寄せ新婚の嫁わが家の味を作りつつあり

評

実家からとり寄せた糠味噌ということになると、もう味はその家のものでなくなる。元来、味覚は女系によって伝えられるのだから、それが当然ともいえる。「新婚の嫁」をいたわりながらも、新しい味に染まってゆく微笑の味わいがよく出でていると思う。

選者 大西民子（平成二年四月号）

佳作

幼な児に色紙折るを教はりてしばしうつつを忘れ居るなり

選者 宮 英子（平成二年七月号）

秀逸

わが家には女子は無けれど紙雛にあられ供えて妻と祝いぬ

選者 長沢美津（平成二年八月号）

秀逸

隣の幼子が置いてゆきたる折紙は幼子が成人になるまでしまつておこう

選者 富小路禎子（平成二年九月号）

奨励

安置されし妻の遺体に添寝する共に過すはこれが最後ぞ

選者 大屋正吉 （平成二年十一月号）

佳作第一位

電車にて三人の刑事にひかれゆく若者の顔に幼なさ残る

選者 宮地伸一 （平成二年十二月号）

奨励

水引草咲き上りますと亡妻つまの友土佐の山里より電話くださりぬ

選者 大西民子（平成三年一月号）

佳作

五十年前わが渡せし通知簿が励みになりしと台湾の教え子

選者 佐藤志満（平成三年二月号）

佳作

生別の母の記憶は無けれども内台航路は楽しかりにき

選者 森岡貞香（平成三年四月号）

佳作

ペスター・チ今日本の日本に在るならば何を説くらむ教育の場で



選者略歷

綜合雜誌「短歌公募短歌館」

選者の略歴　雑誌「短歌」に掲載のとおり　順序不同

島田修二氏（一九八九年四月号による）

昭和三年横須賀市生まれ。「多磨」を経て同二十八年「コスマス」創刊に参加。六十三年「青藍」を創刊編集。歌集に「花火の星」「青夏」「冬音」「渚の日日」（第十八回迢空賞）「東国黄昏」「春秋帖」。歌舞「宮格二の歌」「抒情の空間」「現代短歌入門」ほか。朝日歌壇選者。現代歌人協会理事。

玉城　徹氏（昭和六十二年九月号による）

大正十三年仙台市に生れる。昭和十五年北原白秋主催「多磨」入会。二十一年「新樹」同人となり、その後「野の花」「実体」などの創刊を経て五十二年主宰誌「うた」創刊。詩集に「春の樹氷」、歌集に「馬の首」「樺木」（読売文学賞受賞）「われら地上に」（第十三回迢空賞受賞）などがある。

来嶋靖生氏（昭和六十三年二月号による）

昭和六年旧満洲大連市に生まれる。福岡県に引揚げ、修猷館高校を経て早稲田大学政経学部卒業。在学中早大短歌会に所属。また「楓の木」に入り都筑省吾に師事。現在編集委員。歌集「月」「笛」「雷」。研究書「森のふくろう柳田国男の短歌」など。「雷」により第十三回日本歌人クラブ賞。現代歌人協会理事。

吉田 漱氏（昭和六十三年三月号による）

大正十一年、東京に生れる。昭和二十二年「アララギ」に入会、土屋文明に師事。

二十六年「未来」創刊に参加、編集、運営に当る。現代歌人協会会員、NHK学園短歌教室講師。歌集「青い壁面」「FINLANDIA」歌書「近藤芳美私註」「土屋文明私記」等、他に美術書等多数。

小市巳世司氏（昭和六十三年四月号による）

大正六年東京都に生まれる。昭和十五年アララギに入会し、土屋文明氏

に師事。現在アララギ編集委員にして選歌担当。歌集に「自生地」（合
同歌集）、「ほやの実」。

吉野昌夫氏（昭和六十三年5月号による）

大正十一年東京生れ。昭和十七年「多磨」入会。十八年学徒出陣。この頃から木俣修に師事。二十八年「形成」創刊に参加、編集に当る。五十八年木俣の没後、発行所代表、編集責任者。歌集「遠き人近き人」「夜半にきこゆる」「あはくすぎゆく」のほか、「白秋短歌の究極」「木俣修の秀歌」等がある。

篠 弘氏（昭和六十三年十二月号による）

昭和八年三月東京に生まれる。早大国文卒。「まひる野」編集委員。青年歌人会議などの現代短歌運動に参加。歌集「昨日の絵」。評価「近代短歌論争史」全二巻、「自然主義と近代短歌」「現代短歌史」として「戦後短歌の運動」「前衛短歌の時代」の既刊二冊など。現代歌人協会常任理事。

太田青丘氏（一九八九年六月号による）

明治四十二年八月長野県塩尻市生まれ。昭和三年武藏高校一年の時、「潮騒」入社、太田水穂に師事、大学で中国詩学を専攻、漢詩の風骨、精神を短歌に攝取、短歌の質と領域の刷新に努める。現在「潮音」主宰、神奈川文化賞受賞、「太田青丘全歌集」のほか「危檣」「北窓」。研究評論書多数、目下「太田青丘著作選集」五巻刊行中。

宮 英子氏（一九八九年八月号による）

大正六年富山生れ。昭和十一年「多磨」入会。十九年宮格二と結婚。二十八年「コスモス」創刊によりペンネーム滝口英子を用い編集事務に従う。六十一年格二没後「コスモス」発行人となり本名に戻る。四十三年歌集「婦負野」五十八年「葱嶺の雁」六十三年「花まるらせむ」。日本文芸家協会、現代歌人協会々員。

中野菊夫氏（一九八九年十一月号による）

明治四十四年十一月三日東京生。多摩美大図案科卒業。作歌は特定の師

につかず。昭和五年より歌誌を発行。昭和二十一年新日本歌人協会創立に加わる。昭和二十六年「樹木」創刊今日に至る。歌集十数冊。評論數多數。「中野菊夫全歌集」は現代短歌大賞受賞。現代歌人協会理事。

雨宮雅子氏（一九八九年十二月号による）

昭和四年東京生まれ。学生時代に川上小夜子に師事。「林間」同人を経て個人誌「鷗尾」発行。現在「地中海」同人、常任委員。歌集「鶴の夜明けぬ」（短歌公論処女歌集賞）「悲神」「雅歌」「秘法」。評論「斎藤史論」（平林たい子文学賞）現代歌人協会会員。

佐藤志満氏（平成三年二月号による）

大正二年鹿児島県生まれ。歌集に「草の上」「水辺」「渚花」「白夜」「花影」「立秋」などがある。「歩道」主宰、現代歌人協会理事。

大西民子氏（平成三年一月号による）

大正十三年盛岡市生まれ。奈良女高師在学中に前川佐美雄氏に師事、昭

和二十四年より木俣修氏に師事、昭和二十八年「形成」創刊に参加、同人として現在に至る。

歌集「まぼろしの椅子」から「インドの果実」まで八冊。第七歌集「風水」により第十六回迢空賞受賞。

長沢美津氏（平成二年八月号による）

一九〇五年石川県金沢市に生まれる。一九二六年古泉千権に師事す。
一九四九年女人短歌会結成。以来事務担当。今日に至る。歌集一八冊・
隨筆集七冊・研究書女人和歌大系六巻・他。

朝日新聞（夕刊）

一九九二年（平成四年）一月十四日（火）

「風」渡る「歌会始」

新年恒例の宮中行事「歌会始」が十四日午前十時半から皇居・宮殿の正殿松の間で催された。

今年のお題は「風」。天皇、皇后両陛下、皇族方のほか、特に招かれ

て歌を詠む「召人（めしうど）」や一般公募の中から選ばれた十人の歌が古式ゆかしい節回しで朗詠された。入選歌が年齢の若い順に披露された後、「召人」に選ばれた歌人で国文学者の長沢美津さん、皇族方と統き、最後に天皇陛下の歌が三回繰り返し詠まれた。

※召人 一、舞楽に奉仕するため召された人

二、召歌を奉る人。勅命で、和歌を召された人。

（広辞林に拠る）

富小路禎子氏（平成二年九月号による）

大正十五年東京生れ。女子学習院在学中に尾上柴舟の教えを受ける。

昭和二十年植松寿樹に師事、昭和二十一年創刊の「沃野」に参加。現在選者、運営に当る。歌集「未明のしらべ」「白暁」（歌人クラブ賞）

「透明界」「拓榴の宿」「花をうつ雷」5冊を上梓。NHK文化センター（町田）外数力所短歌教室指導。

大屋正吉氏　（平成二年十一月号による）

明治四十一年神奈川県生まれ。大正十三年「橄欖」に入会、吉植庄亮に師事、昭和三十三年庄亮没後同誌編集発行。歌集「冰雪」「白桃季」（新歌人会賞）。「川鷺」（日本歌人クラブ賞）「斧・タポール」「古丘」「秋冬」「游塵」及び青春歌集「夕陽集」など十冊。

宮地伸一氏　（平成二年十二月号による）

大正九年十一月、東京に生まれる。小、中学生の時代は信州諏訪で過した。昭和十五年「アララギ」に入り、土屋文明に師事。昭和四十九年より「アララギ」選者。歌集に「町かげの沼」「夏の落葉」「潮さす川」がある。現代歌人協会会員。

森岡貞香氏　（平成三年四月号による）

大正五年父の任地島根県松江市に生まれ一歳の時に東京へ移る。昭和七年竹柏会入会。昭和九年「ボトナム」入会。昭和三十一年退会。昭和四十三年「石疊」創刊主宰する。歌集「白蛾」「未知」「鼈」「珊瑚數

珠」、「黛樹」など。現在「石疊」主宰。女人短歌發行人、現代歌人協会理事。

自選歌

小平正治 詠

角川書店雑誌短歌に応募せし短歌の中より
(括弧内の数字は応募の年月を示す)

郵便物の宛名は楷書で書くべしと集配人思いの岳父でありき

（昭和六十二年八月）

白内障の手術によりて頂きし光は無限の恵みと思う

（昭和六十二年十月）

台湾の教え子よりの便り繁く国交無きも情厚きなり

（昭和六十二年十一月）

只管に点字聖書を朗読の女声こえは聖堂に滲み通るなり

（昭和六十二年十一月）

ボタン一つ繕うことも戸惑って亡妻を思つて一点をみつめる

（昭和六十二年十二月）

郁子の蔓中空に伸びる逞ましさ「ジャックと豆のつる」の幻想
に浸る

（昭和六十二年十二月）

鳥瓜一途に赤く色付けば庭木の刈込み先に延ばせり

(昭和六十三年一月)

古稀近くなりたる妻がはにかみておはじきお手玉遊ぶはおかし

(昭和六十三年一月)

手作りのガラシャお玉の人形に何語り居るか病床の妻は

（昭和六十三年二月）

教え子等は還暦を過ぎ恩師には米寿とならる共にめでたし

（昭和六十三年二月）

徴兵検査で筋骨薄弱なりし我なれどふと気がつけば長寿圏内に
あり

（昭和六十三年三月）

子と孫に先立たれし老婆あり命代りたいと肩を落せり

（昭和六十三年三月）

ショーウィンドーの反物をわれみつめ居りどの反物が亡妻に似合うかと

（昭和六十三年四月）

掘炬燵の妻の座に座わり子のために亡妻まの仕草で茶を汲みて居

り
（昭和六十三年四月）

わが名刺龍の図入りのものなれば台湾の教え子は皆よろこべり

（昭和六十三年五月）

大観の富士山の色紙呈すれば台湾の友は皆よろこびぬ

（昭和六十三年五月）

遙々と病妻つまを見舞に来てくれし台灣の教え子と名残惜しみぬ

(昭和六十三年六月)

妻逝きて二年たちて鏽つける裁縫の針を刮ぎ居る我

(昭和六十三年六月)

牧水がこよなく愛せし玉川は小川も丘も傷だらけなり

（昭和六十三年七月）

悪阻つわりにて苦しむ妻なり我もまた体調崩せり遠き日のこと

（昭和六十三年七月）

土佐の地を日々慕いたる亡妻^{つま}思い懇かれし如く土佐日記求む

(昭和六十三年八月)

亡き妻の洗礼名はモニカなりその名の如く至上の妻なりき

(昭和六十三年九月)

出棺の亡妻の柩に舞う雪は天使の群の舞にてあらむ

（昭和六十三年九月）

装身具には関心なかりし亡妻にして部屋のあちこち人形ばかり
なり

（昭和六十三年十月）

わがくらし何を切棄て生くべきか世の贅沢に慣るるを慎む

（昭和六十三年十月）

二本松なる智恵子切絵展を往きて見つ色彩の調和と造型に驚嘆
す
(昭和六十三年十一月)

ベト・ドクの分離手術の成功に思はず端座して幸先を祈る

（昭和六十三年十一月）

病む老妻^{まつ}を喜ばすため鯛焼を懐に入れ急ぎ帰宅す

（昭和六十三年十二月）

折々はお手玉おはじきに興じたる金婚近き亡妻と我なりき

（昭和六十三年十二月）

病状は樂觀出來ずと予感して妻の看護に係りて居り

（平成元年一月）

投函してポストを凝視する女性あり思い切なる手紙にてあらむ

（平成元年一月）

自力にて寝返り出来ぬ病妻つまなれば夜の長きは責苦に似たり

（平成元年二月）

あなたの嫁になれたのは仕合せと老いたるも尚語る亡妻まゝなりき

（平成元年三月）

台湾の教え子等より贈られし記念の文字は永懷師恩なり。

（平成元年三月）

身籠りし妻の欲しがる海苔巻を市中^{まちじゅう}探し昭和十八年の夏

（平成元年四月）

亡き岳父は醉茶庵一荷の雅号にて俳句を詠みて風流に浸れり

（注）荷は蓮

（平成元年四月）

妻逝きて三年針^{みとせ}鏽付きたればボタン繕いに戸惑い居れり

(平成元年五月)

らつきょう五^{きう}匂の皮剥き根つ子切り疲れましたと笑う老妻愛し

(平成元年五月)

わが生後五カ月で逝きし父恋し鏡に面して父を求める

（平成元年六月）

「起きませんか」との妻の声に目覚むれば夢の中なる亡妻の声
なりき

（平成元年六月）

到來品の包装用リボンを捨て難く文箱に貯めて喜ぶ老妻は

（平成元年七月）

亡き妻が格別好みし素甘すあまをば遺影に供えて我しばし黙す

（平成元年七月）

知恵遅れの子等と共に勉強ですと養護学校長の顔は爽やか

（平成元年八月）

わが一泊出張明けの日は少女のごとくわれの帰りを待つ妻なり
（平成元年八月）

き

妻子連れ東京から土佐えの疎開行難儀なりしも樂しさもありき

（平成元年九月）

妬むこと怨むことをば知らざりし妻の臨終は安らかなりき

（平成元年九月）

息の新婚旅行は古都ローマにて教皇の祝福を受け栄ある門出

（平成元年十月）

入院中亡妻が使いし箸茶碗没後三年なるも捨てる気になれず

（平成元年十月）

遠足で先生に負はれたこともある弱い子でしたと老妻は微笑む

（平成元年十一月）

愛妻家と揶揄され乍ら四十八年間虚弱な妻を労はりて來ぬ

（平成元年十一月）

亡き老妻^{まつ}の書棚に有りし聖書をば新婚の嫁は座右に置けり

(平成元年十二月)

猿飛佐助の豆本読みし大正末期物乏しきも屈託なかりき

(平成元年十二月)

カレンダーの日日にばつをし新婚旅行の息子と嫁の帰り待ち侘
ぶ

（平成二年一月）

亡妻に代り古き重箱にお節料理詰める新婚の嫁の手白し

（平成二年一月）

地蔵尊にプラスチックの餅供えあり瑞穂の国が不毛となりしか

（平成二年二月）

子の一人を背負い二人を前後に乗せ自転車を漕ぐ女性は輝く

（平成二年二月）

臨終の妻の身体^み清めるナース等に万感こめて目礼したり

（平成二年三月）

御巣鷹の飛行機事故の責任を問えぬ現実に怒り込み上ぐ

（平成二年三月）

即席食品世に溢れれば厨にて擂鉢擂粉木疎う^とまれて居り

（平成二年四月）

單身赴任なら昇格の場あれど断はりぬ弱き妻を見るが仕合せ

（平成二年四月）

妻逝きては障子の張替え氣乗りせず切り貼りだけで今年はすま
せり

（平成二年五月）

平和条約結ばれし頃足踏みのオルガン買って満ち足りて弾きぬ

（平成二年五月）

喜寿のわれコールユーブンゲンを練習し居り師範生たりし昔な
つかし

（平成二年五月）

亡き妻が蓄え置きし端切れ類われには宝ぞ七色に輝く

（平成二年六月）

鮎解禁の合図の花火はけだるくとどろとどろと伝わりて来ぬ

（平成二年六月）

顯微鏡にて羊齒だの胞子を見て居ればしばしうつを忘れ居るなり
（平成二年七月）

ロシヤ革命はわれ五才の時ペレストロイカの今は七十七才よく
ぞ生きたりし

（平成二年七月）

余分な金を取ろうとしない歯科医あり健保治療で噛めればよし
と

（平成二年八月）

戦死せし夫の面影いだきて五十年小学校の友は老人ホームに入
りぬ

（平成二年九月）

喜寿にして源氏物語学ばんと心定めば命燃ゆるなり

（平成二年九月）

戦時中詠める歌

小平正治
詠

弛^{たゆ}みなく仕事終りて祈りける疎開の妻子恙なかれと

昭和十九年九月・十月作

拙^{つたな}くとも短歌の道に勤^{いそ}しまんとまづは蒼樹をひもときにけり

朝吹磯子著 「蒼樹」をひもときて

久方の空はさやかに寂かなる芝山内の朝ぞうれしき

東京都防衛局合宿所にて

不自由を忍びて不平言はざりし妻を思えば涙こぼるる

吾なけり口かみしめて吾なけりテニヤン大宮の悲報をききて

すずかけの一葉一葉の色づけりそぼ降る雨の冷たさ増さりて

内幸町にて

一簞の食一瓢の飲を楽しみし聖の心ぞ尊かりける

論語より

汐やけの面輝かせ逞しう転任の辞を速ぶ大井見習士官

五十日にして死線を越えし正寿よ冬の寒さに耐えよ雄々しく

這えば立て立てば歩めの親心今に知る子の父となりて

大枝を揺がす程の暴風吹くと気象警報に身内しまるを

小口扱貨物の受付停止となりにけりこの大御戦の激さまさりて

指揮棒の狂うかとまがふはげしさよあまたの楽器ただ一つに和
して

「ころよきヴァイオリンの調妙たえにして秋の寂夜のひとときたの

し

昭和十九年十月九日　日比谷公会堂に於ける辻久子
独奏提琴と交響曲の夕を聴きて

平成四年四月二十三日午後七時、東京文化会館に於て、辻 久子「音楽
生活六十周年記念」ヴァイオリン・リサイタルを聴き感激を新たにせり。

おおかたの人々^{ひと}退けてタイプ打つ鍵^{キー}のこだますビルの四階

古典^{ふみ}学び大和言葉を数知りぬ三十路を越えし今日此の頃に

あはれにも見えてはかなき人の列ただ一箱のタバコ買わんとて

人の世は憂き事多く辛けれど正寿^{まさと}あれば希望^{のぞみ}あふるる

独逸人のビールのみで戦勝語るありほほえましき国民酒場なり

正寿の肥立ちとみにすこやかに前歯二耗ほど生えにけるかな

わが夫つまは召されしものとさだむべし在京あ
るとおもえば弛む心ぞ

親しみて常に用いし鉛筆の三年みとせを経て一寸程になりぬ

報道を魂なきが如く聞きいりぬラジオ終りてふとわれにかえり
ぬ

海上の戦況報道をききて
昭和十九年十月十六日午後七時台湾と比島東方

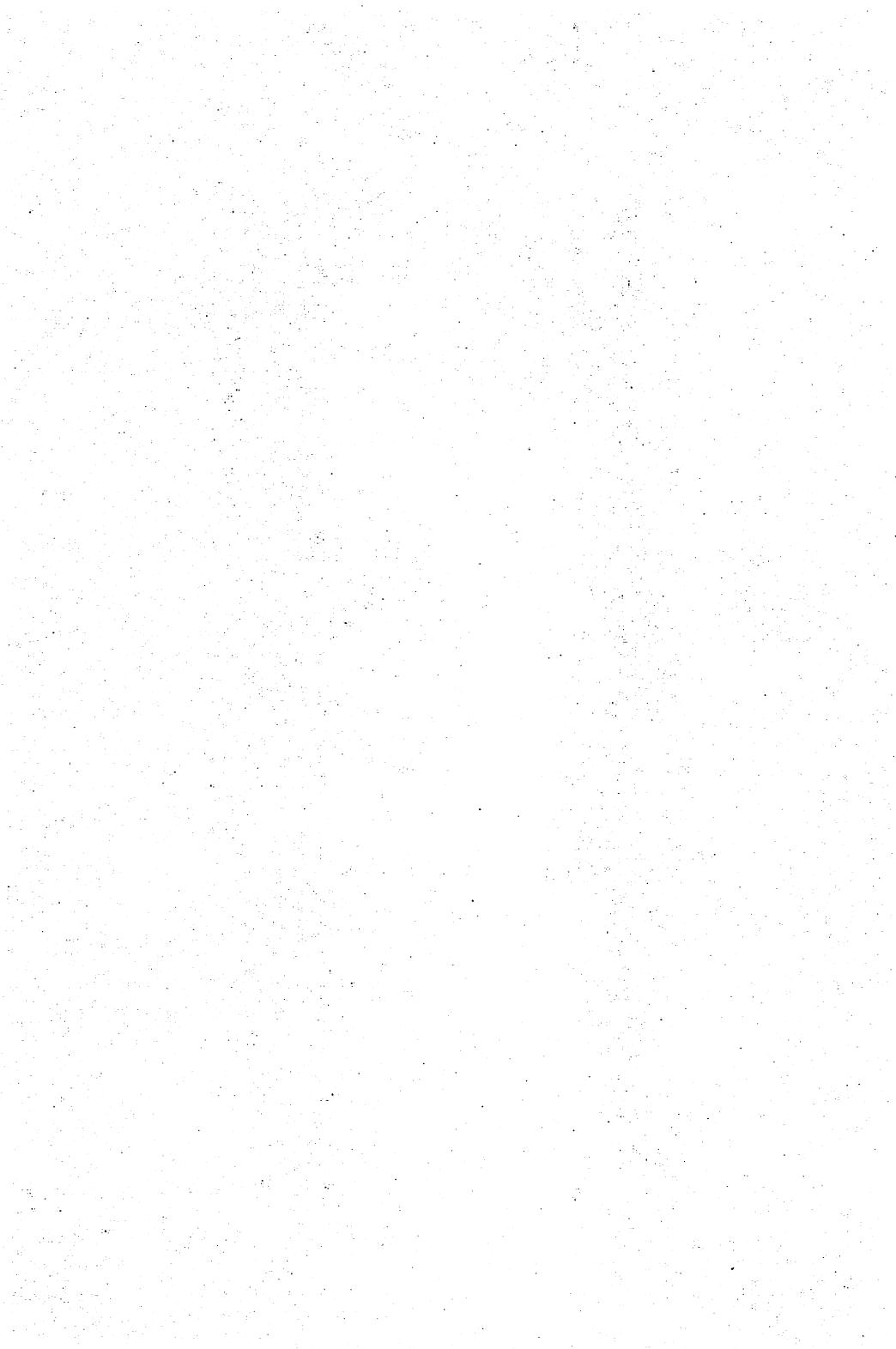
ん B 一十九の台湾爆撃をきくからにうからはらから如何にいまさ

一枚の外食券は丙券なり外の食事のなにか淋しき

射干玉ぬばたまの闇の街にも慣れにけりおほみいくさの深みゆくとき

配給の乏しき日々にありぬれど心の糧は日毎にたまへ

虎の門なる金刀比羅宮の秋祭り陽うららかにして人等なごやむ



編者が疎開中の妻に送りし歌

小平正治
詠

津野山は心の里ぞしみじみとえにしを思う過ぎ来し四歳の

行列はいくさのうみし道徳か人等黙して秩序を守る

正寿に聖き歌をきかせんと少年讚美歌まづわれが学ぶ

鳥ならば飛ばましものを幾百里へだつる津野の山河なつかし

（昭和十九年十一月九日）

みいくさの最中に生れ遅しう御母のなさけにのびゆく吾子よ

正寿よかたくむすびし口のごとく強く男々しく肥立てとくとく

かくほどにいとしきものぞ吾子おもふ我が親心何にたとへん

（昭和十九年十一月十五日）

妹住める山の寒さの偲ばるるはや雪をみしと便りありせば

（昭和十九年十二月八日）

射干玉の闇夜を破る高射砲胸打つばかりとどろとどろく

狐火のごと燃えて降り来る焼夷弾雨降らんとも我は恐れじ

(昭和十九年十二月十二日)

あとがき

昭和十五年の始めに台湾高雄から妻房子が婦人之友社の雑誌婦人之友の「生活歌集」に応募した短歌が五月号（選者若山喜志子様）に入選しました。

その時の房子（二十三才）の喜び様は大変なものでした。当時はご承知のとおり本国（内地）に対して朝鮮・台湾・樺太などの外地がありました。外地からの入選の内訳は次のとおりです。

奉天 一人

北京 一人

新京 一人

台湾 一人

この台湾 一人が妻房子なのです。

私と妻は昭和十六年四月の上旬に日本に帰りました。

私は神戸から直ぐ東京にきました。

妻の房子は私の生活が安定する迄神戸から、ふるさとの高知県高岡郡東津野村に帰りました。その時、ふるさとの口目ヶ島の中河原で撮った房子の写真は巻頭にのせて

あります。入選短歌に詠まれている「中河原」なのです。

私たちが日本に帰ってきた目的は私が高文の受験準備のためでした。太平洋戦争の勃発で勉強どころではありません。勉強を捨てなければなりませんでした。

大正七年から昭和十六年まで住み慣れた台湾でしたが太平洋戦争勃発前に日本に帰って来たことは「よかつたなあー」と染々思っています。この瀬田に住みついて四十二年が経ちました。

亡妻の追悼短歌集を出版することが出来て感謝の心でいっぱいです。

何か大変な役を果して肩の荷を下した気持で居ります。

平成三年八月吉日

小平正治

編者略歴 小平正治（こだいら・まさはる）

大正2年3月28日 東京に生れる
昭和6年3月 台湾・台中師範学校卒業・訓導
昭和6年4月 高雄州鳳山公学校勤務
昭和10年 普通文官試験合格（台湾總督府施行）
昭和12年 台湾高雄市に於て結婚
昭和12年12月 高雄州立高雄商業学校事務官
昭和16年4月 同校退職・日本に帰る
昭和16年6月 東京市防衛局に就職
（昭和18年7月東京都となる）
昭和16年10月 専門学校入学者検定試験合格（文部省）
昭和45年11月 東京都定年退職
昭和45年12月 三井信託銀行参与
昭和60年6月 同行退職
昭和60年7月 同行顧問
昭和62年6月 同行顧問辞任



制 作	編 者	再 發 行 版	不 入 山 山 麓
株式会社 東京都中央区築地一丁目七 電話(03)3546-1804	小平正治 東京都世田谷区瀬田四丁目十二 電話(03)3700-15101	平成三年八月十二日 平成五年三月一日	

